

## 明日香村の特別史跡・石舞台古墳

昨年の晩秋、学生たちと歩いた明日香村には、飛鳥時代、つまり7世紀に入ってから築かれた「終末期古墳」が数多く残されている。高松塚古墳とキトラ古墳は7世紀末から8世紀初頭に築造された小さな古墳だが、極彩色の壁画をもつことで全国的に有名だ。一方、石舞台古墳は、墳丘の盛り土が失われて天井石が露出した横穴式石室の大きさで知られている。石舞台古墳は、古く1933年に末永雅雄氏が行った発掘調査によって、一辺55mの方墳または上円下方墳で、周囲に周濠と外堤が巡らされていること、墳丘と外堤の斜面に貼石が施されていること、横穴式石室には排水溝が設けられていることが明らかになった。石室内からは家形石棺の破片も出土した。玄室（石室が納められた部屋）の長さは約7.8m、通路となる羨道の長さは約11.5mで、両者を合わせた石室全体の長さは19.3mとなる。古墳の築造時期は7世紀の初頭から前半にかけてと見られ、被葬者は626年に没した蘇我馬子とみる説のほか、蘇我稲目説がある。高松塚古墳、キトラ古墳とともに、国の特別史跡として手厚く保護され、世界遺産暫定リストに記載された「飛鳥・藤原—古代日本の宮都と遺跡群」の構成資産にもなっている。また、3古墳ともに国営公園として整備が進められ、飛鳥観光の主要な見所となっている。

## 塚穴山古墳と史跡・杣之内古墳群

石舞台古墳を典型例とする「石舞台式」の石室として、古墳時代研究者として知られる白石太一郎氏が示すのが、天理市杣之内町に所在する塚穴山古墳だ。この古墳は、天理高校の敷地奥にあり、一般にはあまり知られていないかもしれないが、学術的・文化的価値が非常に高い極めて重要な古墳と言ってよい。明治年間には古墳の存在が知られていたものの、その後、いつの間にか忘れられていたのが、1964年、土取り工事で古墳が再発見され、天理参考館が発掘調査を行った。その調査で、古墳は直径65mの円墳で、幅13mの周濠がめぐること、埋葬施設は南南西に開口した横穴式石室であること、羨道に暗渠の排水溝が設けられていることが確認された。石室内からは、内面に赤彩を施した凝灰岩製の石棺破片、土器類などのほか、五輪塔・石仏などが出土し、中世に墓地として利用されていたことが明らかになった。

調査後は、古墳は破壊されることなく、天理高校の敷地内に保存され、1988年、隣接地の建物建て替え工事に伴って、埋蔵文化財天理教調査団が第二次発掘調査を行い、墳丘東側の周濠の状況が明らかになった。周濠から出土した土器によって古墳の築造時期が7世紀初頭であることが確認されたほか、墳丘の規模が63.4mと修正され、横穴式石室の全長が17.12m（玄室7.04m、羨道10.08m）と、石舞台古墳に匹敵する規模であることが正確な実測図を添えて報告された。2014年3月には、有志による杣之内古墳群研究会の活動として、天理大学と国際日本文化研究センターの合同チームが最新の機器を用いたレーザー測量調査を行い、石室と墳丘の3次元データを取得した。

2018年度、考古学・民俗学専攻を中心とした共同研究「天

理市杣之内地区における文化遺産の保存・活用を通じた学習と交流の空間デザインのための基礎的研究」(代表:

丸山泰明)では、メンバーが成果を報告したり、現地研修を行ったりする研究会「大学キャンパスと文化遺産」を定例で開催し、研究を進めてきた。第2回の研究会(2018年6月25日)では、旧外国語学校本館、創設者記念館、天理高校本校舎を見学したあと、高校敷地内を抜けて、塚穴山古墳を訪れた。その際、注目すべきことは、柔道場裏から塚穴山古墳に向かう通路の脇に、古墳の方向を矢印で示した道標が新しく設置されていたことだった。貴重な文化財の公開に向けた前進と評価できるが、さらに一歩進めて、古墳の歴史的意義を解説する説明板を設置するべきだろう。

第4回の研究会(同年9月19日)では、天理市文化財課の石田大輔氏が「杣之内古墳群をめぐる近年の状況について」と題した報告を行い、2017年11月、国の文化審議会が西乗鞍古墳を史跡に指定

し、史跡・西山古墳と合わせ、名称を杣之内古墳群とするの答申をおこなったこと、翌2018年2月に官報に告示されて史跡指定が正式に完了したことなどを説明した。一方、天理大学と天理市の共同調査が始まった東乗鞍古墳をはじめ、杣之内古墳群には史跡に指定されていない重要古墳がいくつか存在することにも触れられた。とくに塚穴山古墳の場合は全国的に特異な事例で、読売新聞が記事(2011年5月24日)で取り上げたように、国の文化審議会が国の史跡に指定すべきと答申を行ったにもかかわらず、地権者の同意が得られないため、官報での公示がなされないまま、史跡指定が未完了の状態が続いているのだ。このように柵上げ状態になっている遺跡は全国に52件あり、特別史跡62件を含めた史跡の総数1,795件(2018年11月現在)を鑑みると、特殊な状態ということが理解される。一般に、遺跡を含む文化財の保存と活用に関しては、さまざまな利害関係を調整し、マネジメントを行うことが求められ、杣之内古墳群の西乗鞍古墳の場合も、民間業者との折衝が難航したのだが、利害の衝突を乗り越えて、文化的な価値が認められ、最終的に史跡指定に至った経緯がある。塚穴山古墳の場合は、文教地区の只中に所在するという、むしろ好条件を備えているはずなので、知恵を出して史跡指定を実現し、大計を立てて、すぐ隣に所在する西山古墳と一体的な保存・活用を図っていくべきだろう。



塚穴山古墳の横穴式石室



研究会で報告する石田氏